

# 王妃の肖像

——三島由紀夫『暁の寺』におけるタイ国表象——

久保田 裕 子

## 一 三島由紀夫とアジアという問題

三島由紀夫とアジア——この問題に関して、あらためて考えてみたい。従来も三島自身のエッセイなどの発言をたどりつつアメリカとの関連に触れ、あるいはヨーロッパ文学との影響関係についての指摘がなされてきた。しかし欧米への渡航体験や文学的影響関係が作品に刻印されている一方で、三島はインド・タイ国、ラオス、カンボジア、韓国を訪れている。『暁の寺』（『新潮』一九六八・九—一九七〇・四、単行本・新潮社刊、一九七〇・七）や『癡王のテラス』（中央公論社、一九六九・六）、あるいは中村光夫との『対談・人間と文学』（講談社、一九六八・四）における発言を含め、アジアをめぐる三島のテキストはどのような特徴を示すのか。さらに三島文学を論じるにあたつて（日本）という表象が、日本対西欧という単線的な関係性

ではなく、そこにアジアという変数を入れてみたとき、何が見えてくるかという新たな問題系が浮上してくる。

この問題について、赤坂憲雄と吉本隆明の対談『天皇制の基層』（作品社、一九九〇・九）において、吉本が「文化概念としての天皇」について述べた指摘が一つのヒントになる。

吉本（略）三島さんの考え方を、もうひとつ刺激してるのは、チベットのダライ・ラマ、あるいはタイの皇帝みたいな一種の宗教的な神聖帝王、もつといえはオセアニアの未開の島でいまでもあるかもしれない王様、そういう意味合いの王様であらせたいみたいなことを、外から見て三島さんは感じたんじゃないでしょうか。それについて象徴天皇制は、近代西欧的な王の概念とそれから伝統的なアジア的な概念、あるいは日本のな王の概念とのいわば折衷にしか見えない、と三島さ

んはそう思ったんじゃないか。そうじゃなかったら、ちゃんと歴史的に由緒あるチベットの王権とかタイの王権とか、東南アジアの島々、オセアニアの原始的な、あるいは未開的な島々の部族の王みたいな、そういう由緒ある王というようなところへ日本の天皇制を戻したい、置きたいみたいなのがモチーフとしてあったと思うんです。

吉本の指摘はこれ以上の具体的な言及はなく、後述するように、「タイの王権」もチャクリ朝は明治時代と制度的な共通項を持つ近代的制度として継続してきた経緯があり、「原始」「未開」という表現は適切ではない。また言うまでもなく「アジア」として一括りにできる実体が存在するわけではなく、それぞれが個別の歴史と背景を持っている。しかし三島の述べる〈天皇〉の外側に、日本以外にアジアにおけるいくつかの王権を視野に入れる必要があるという指摘について、あらためて着目してみたい。三島のテキストに表れたアジアの諸相について、同時代の歴史的・社会的言説の側へ解放してみたとき、そこに作家個人の認識の産物という閉じられたイメージを切り開く可能性を見出すことができるのではないか。三島文学の総体についてその全体像を把握するために、周縁的課題と見なされてきた三島とアジアという問題系を導入するのが本論の試みである。

## 二 「文字でスケッチ」——視覚表象の言語化

『暁の寺』執筆に際して、三島は一九六五年一〇月、一九六七年一〇月に取材のため、タイ国に滞在して精力的な取材を取行した。一九六〇年代の東南アジアに赴いて調査や取材をしたという点でも、同時代的な日本文学の中で特殊な成立事情を持つている。三島の渡航経験は、一九六〇年代当時の東南アジア一帯を席卷していたベトナム戦争の直接的な取材ではなく、また一九四〇年代前半の南方徴用作家たちとも異なる、異文化との独自の出会いのかたちがあった。彼自身は「第三卷『暁の寺』はエキゾテックな色彩的な心理小説」と述べる一方、「第三卷の取材のために、東南アジアへ二度旅行をしたほか、国内の取材にさまざまな方のお世話になった。私の取材はひとへに小説のミリュウを大切にするためである」と述懐している。

その上で本論であらためて着目したいのは、「わが創作方法」〔文学〕一九六三・一二で述べている、「環境の描写を精密」にするために、「小説の背景となる場所をゆつくりと歩きまはり、どんなつまらぬ事物にも注意を向け、文字でスケッチをとる」ことで、「現実よりも強烈な現実」を再構築するという見解である。「スケッチ」という絵画技法を媒介にして、いわば視覚情報を言語を通した現実把握による情報に変換させるという方法意識は、夥しいエキ

ゾチックな表象で満たされた『暁の寺』において実現されている。

ところで『暁の寺』研究史においては、「世界解釈の小説」(『豊饒の海』について)「毎日新聞夕刊」一九六九・二・二六)として構想された『豊饒の海』の中で、作者自身の問題意識の見解と解説に基づき、唯識論などの観念的・思想的問題と関連付けて論じられてきた。『暁の寺』をめぐる先行研究の整理としては柴田勝二の『『暁の寺』と唯識論——『豊饒の海』への視角<sup>2)</sup>』に詳述されている。井上隆史は『豊饒の海』における輪廻説と唯識論の關係について、転生の論理的な支柱となった唯識論が本多を惹き付けるものの、「結局、生の基盤が徹底的に解体されてしまう自身の体験を理屈付ける否定的な意味しか持ち得なくなる<sup>3)</sup>」ニヒリズムの問題と関連させている。柴田は輪廻説や唯識論について、「情念の蘇生という物語内の主題を強化しつつ隠蔽する装置であった<sup>4)</sup>」と述べ、唯識論や輪廻説の深層にある別の物語構造を重視している。また田中美代子は「世界は存在しなければならない」という至上命題による、力強い生の肯定の哲学であり、世界のまるごとの容認である<sup>5)</sup>」と述べ、ニヒリズムに逆行する生の哲学を見ようとしている。このような唯識論や輪廻説などの宗教的・観念的問題から離脱した論としては、「世界資本主義のもとでの小説の死」を描くことが『暁の寺』の〈意図〉なのだとい

う事<sup>6)</sup>という柳瀬善治の指摘は、現代社会の政治的・経済的問題からの視点を導入した。いずれにしても以上の論文は主に『暁の寺』の宗教的・思想的基盤の解釈であると言える。

しかし観念的思索が展開される一方で、『暁の寺』には、物語内容の展開とは一見関係ない、さまざまなフラグメントが鏤められている。先行論文の指摘するように、時空を越えた情念や唯識論などの物語がテキストに構造化されているが、一方で主題論的な問題とは無関係に見える伝統的建築物や絵画などの詳細な描写が見出せる。テキストの隅々まで充填している夥しく微細な描写の内実をどのようにとらえるかという問題は残されたままだ。

その一例が冒頭に展開する、バンコク観光案内の様相を呈する記述である。これらの場所は一九四〇年刊行の『タイ国概観』(日本タイ協会、一九四〇・十二)の「観光と旅宿」に、「盤国にて見物すべきものは王宮、王宮内のワット・プラケオ、ドシット離宮(略)ワット・ポー、ワット・アルン、ワット・サケー、ワット・ベンチャマボピット(大理石寺院)」と記載されている場所と一致する。本多繁邦がバンコクで訪れた観光スポットもほぼ同じコースをたどっているが、テキスト内の時間である一九四一年において、既に観光地として日本国内においても知られていた場所である。言い換えれば『暁の寺』の冒頭に展開している

のは、あたかも観光する本多のまなざしと同一化したかのような語り手の視線である。ここには視覚的情報をディテールの描写を通して言語に変換して表象Ⅱ代行し、いわば言語による把握と再構築によってテキスト上に現存させるという言語実践が展開している。

五井物産の招聘によってタイ国（当時の国名はシャム）に渡航した本多は、南洋地域に進出した財閥系商社五井物産の国際訴訟の成功報酬として、タイ国内やインドへの「大名旅行」に招待される。したがってテキスト冒頭の叙述も、帝国主義的進出の一翼を担った本多の「観光のまなざし」と近接している。しかしここに展開するタイ国の歴史や文化に関する説明的な記述は、一時的滞在者に過ぎない本多の知識の範疇を越えているように見える。言い換えればテキストの中には登場しない語り手の叙述は、本多の視線と同一化しつつも、それを超越した俯瞰のパススペクティブに立った視点によって構成されている。ここで語っているのは誰なのか、そしてこれは誰に向けられた説明なのか。本多と一体化した語り手が、世界解釈の衝迫にとらわれている彼自身の目を借りて、緻密かつ偏執的なまでの独白を展開している、と、とりあえずは言えるかもしれない。しかしここには、先に述べたような「文字でスケッチをとる」「ことそのもの、言い換えれば目にしたものを言葉として定着させる」という、〈見る〉ことの欲望そのもの

に連結する、表象Ⅱ代行への欲望が湧出してきている。「形而上的な喜びに向つてがつと牙を鳴らし涎を垂らしてゆくこの接近に、本多は自分の趾に密林を潜行する獣の爪を感じた。さうだ、彼はこの喜びのためにだけ生れたのだ」『暁の寺』第一部三』という認識の欲望にとりつかれている本多にとつて、視覚性が優越する旅行体験は、〈見る〉行為と直接的に結びついていった。言語化された視覚的表象によって展開する建築・美術の数々は、唯識論や生まれ変わりとといった物語内容からは逸脱した過剰さをもつてテキストの中に屹立している。

それでは『暁の寺』において、いかなる回路を経て、〈見る〉行為は言葉と通路を繋ぎ、テキストへと生成されていくのか。まず『暁の寺』に見られるタイ国の建築や絵画に関する緻密な描写について、その細部を検討することで、文学テキストと視覚表象との関係という問題系の中に再配置して見る必要がある。三島とアジアという問題について考察する端緒として、『暁の寺』の中のまなざしの方向性をたどってみた。

### 三 『暁の寺』の中の視覚表象——建築・絵画

建築や絵画などの視覚芸術にまつわる描写は、『豊饒の海』の他のテキストの冒頭部分にも見出すことができる。

建築を細部まで描写し、それを通して時代・社会の背景をメタファーとして浮かび上がらせようとするまなざしがある。ここには見られる。一例を挙げると、『奔馬』（『新潮』一九六七・二・六八・八）において、裁判官時代の本多繁邦が大坂控訴院の裁判所の高塔から地上を見下ろす場面がある。国家理性を背景に「鉄骨だけの建築のやうな論理的な高み」において、「人間性の上澄みの部分から底のはうを鳥瞰する」と本多が考える場面とも対応している。いわば建築が主題論的なモチーフとして機能し、テキストの冒頭において隠喩的なイメージをはらみつつ展開されている。

さらに『暁の寺』には、観光地として見られたタイ国が描かれる一方、タイ国の歴史や日タイ関係にまつわる情報が組み込まれ、ラーマ八世の時代が舞台となっている。ここで『暁の寺』から一旦離れ、背景にある日タイ関係について目を向けてみたい。

ラタナコーシン朝（チャクリ朝）ラーマ五世チュラロンコーン王は明治天皇と同じ一八六八年、十五歳のときに即位し、国内の統一と近代化、ヨーロッパ列強の圧力下の独立の維持といった日本と同じ課題を抱えていた。チュラロンコーン王の時代に、「国王のリーダーシップのもとに内閣制度を創設し、官庁組織を整備するなど近代国家としての体裁をととのえて国際社会に参入<sup>9)</sup>」した。欧米列強からの独立を維持しつつ近代国家を構築するという共通の課題

を擁していた明治天皇としばしば比較され、王は「並々ならぬ日本への関心を示していた<sup>10)</sup>」という言葉が日本において流通していた。

このように日本とタイ国とは、皇室・王室が近代的国民国家の形成に大きな役割を果たしたという点でも共通点があり、明治期以後には相互交流も密接であった。『暁の寺』においても両国の歴史的関係が点描され、独裁政権下の「飾り物」の「第一摂政アチット・アパー殿下」が大理石寺院を参詣する場面が描かれている。三島の『蔵書目録<sup>11)</sup>』にも所載されている『タイ国通史』（日本タイ協会編、興亜日本社、一九四二・五）には、「両国皇室の間に於いても昭和十四年七月我が秩父宮殿下にタイ国王室より王族最高勲章を御贈進あり、我皇室よりもタイ国摂政首座アーティツト殿下に大勲位菊花大綬章を御贈進あらせられた」という記述が残されている。本書では両国が王室・皇室を持つ共通性が強調されているが、実際にはチャクリ朝のタイ王室は「ヒンドウー的・仏教的王権観<sup>12)</sup>」を包含し日本の皇室と単純な比較はできない。しかし一九四〇年代前半の日本における議論においては両国の異質性より、共通性を強調し、同盟国タイ国を大東亜共栄圏構想に組み込もうとする日本側の論理に基づく同一化の言説が見られた<sup>13)</sup>。そしてジャントラパー姫は、ラーマ五世チュラロンコーン王の孫（モン・ジャオ）という設定であり、小説の舞台となったタイ

国近代史に登場するチャクリ朝の歴史的経緯と日タイ関係をめぐる同時代言説を踏まえた上で、『暁の寺』の設定が構想されたことがわかる。

「第一部」の舞台となった昭和一〇年代は、日本において図書・新聞・雑誌において、写真などの映像メディアを含むタイ国をめぐる情報が数多く見られた時期であった。その中でタイ国の妃をめぐる情報についても日本において盛んに情報収集が行われた。ここでは詳述しないが、例えば「新皇后冊立問題ヲ中心トシ暹国宮廷内幕ニ関シ報告ノ件」(「各国皇室関係雑件 第一巻 機密公第十號 大正十二年四月二十六日」外務省外交史料館)というラーマ六世の皇后問題について報告した暹羅国特命全權公使矢田長之助から外務大臣伯爵内田康哉宛の文書があり、シャム国王室の皇后の動向についても日本政府内において高い関心があったことをうかがわせる。三島のテキストにおいて、『豊饒の海』だけではなく皇室や華族制度をめぐる秘匿された禁忌が描かれている。王権をめぐる禁忌が政治的な背景を源泉として、物語として再構築され、三島のテキストにおいてさまざまな物語を生み出していった。

#### 四 スナンター妃の肖像画

『暁の寺』に話を戻したい。ジャントラパー姫は本多と

の三度目の面会の際にチャクリ宮殿(プラティーン・チャックリー・マハー・プラサート宮殿)に呼び出して、祖母のスナンター妃(Queen Sunanda Kumariatana)の肖像画を見せる。「この美しい肖像画を本多さんにお目につけたいばかりに、チャクリ宮へお招きになったのです」という女官の言葉や、「どことはなしに月光姫を思はせる」肖像画の印象が描かれている。本多とジャントラパー姫との出会いに、ラーマ五世の妃であったスナンター妃という実在の人物がテキストの深層において重要な役割を果たしていることを示唆している。妃の来歴については、既に拙稿において論じたが、本論においては説明の必要上重複する部分もあることをお断りしたい。その後の調査によって明らかになった点について報告し、生まれ変わりの主体であるジャントラパー姫の起源となる存在として妃が選ばれた意味について考察してみたい。

本多はゆつくりと一枚一枚の肖像画を眺めて歩き、大帝の四人の妃のうち、第一夫人のプラバンピー妃が、三人姉妹の末の妹であることを、菱川の説明で知った。その姉のソワング・ワッタナ、長姉のスナンターを引き較べると、誰の目にも一番美しからうと思はれるのは、スナンター妃であった。(『暁の寺』第一部十一)

この場面では本多に見せた肖像画は、チャクリ宮殿の西翼のギャラリーに現在も飾られているチャクリ朝歴代王

妃の肖像画であり、三島がチャクリ宮を見学したときに見た「歴代王妃の肖像画」の一つであると推察できる。

Bang Pa-In Palace<sup>(51)</sup>には、スナンター妃の伝記と事故の顛末についての記載があり、Prince Durnong Rajaputabが執筆した伝記が引用されている。それによるとスナンター妃は、ラーマ五世の九人の妻のうち最高位の四人の皇后の中のひとりであり、異母兄に当たるラーマ五世の子供を出産したが、仏歴二四二三（一八八〇）年五月三十一日、十九歳のときバンバインへ船で出かける途上で亡くなった。当日はチュロンコーン王の命によって副官の Phraya Monthが全ての妃を引き連れて船に便乗しバンバイン離宮へ出かけたが、サオワパー妃（『暁の寺』ではブラバンピー妃と表記）の乗った船が座礁するのを避けるため急旋回し、スナンター妃と娘の乗った船が転覆した。そして妊娠中のスナンター妃は幼い娘と共に亡くなり、父ラーマ五世の後を継承したラーマ六・七世の国母となったのは、後に詳述する末妹の第三王妃サオワパー妃であった。三島は複数の王妃の肖像画の中から、ジャントラパー姫に「瓜二つ」の祖母としてスナンターを選び出したことになる。

石井米雄は「タイ国王をめぐる言説」において、この事件について「王および王族の身体の聖性についての伝統的観念を示す歴史的事件」と位置付けている。

ラーマ四世のスナンター王女の乗船が、アユタヤ近

郊のバンバインで沈没し、王女の身体が水中に投げ出されたとき、王女を救おうと手を差し伸べた臣下が「玉体に触れるな」と叱責され、そのため王女はおぼれ、ついに水死するという有名な事件である。この事件によりスナンター王女は俗に「船没王女 phra nang rua lom」と呼ばれることになった。

石井の説明によれば、王族の身体に付与された聖性に関する認識が当時のタイ宮廷において広く共有されていたことを示す事件であった。三島は一九六七年に、スナンター妃の墓とモニュメントのあるバンバイン離宮を訪れ、この場所は『暁の寺』において、本多繁邦とジャントラパー姫が船遊びをする場面にも登場する。しかし三島が事件に関する知識を得ていたとしても、あくまでも一週間程度の旅行において得た内容に過ぎず、妃自身や事件の経緯についての程度の知識を持っていたかは不明である。したがって悲運の妃について三島が得た来歴は、恋と夭折、王権を揺るがす恋という、『豊饒の海』に展開する三島の主題を通して変換され、いわば三島の主題のフィルターを通してスナンター妃のイメージが作り替えられたと考えられる。

次に語り手の目を通した肖像画の描写に目を向けてみたい。窓のかたはらの卓に片手をついた立像であるが、窓外にはほのかな青空に夕雲が浮き、枝もたわわなオレングザが窓からのぞいてゐる。卓上には小さな蓮の花を挿



【図1】スナンター妃（肖像画）  
（チャクリ宮殿）

した七宝の一輪挿や、金の酒瓶、杯などが置かれ、妃は金の腰袴の下から美しい素足をあらはし、桃いろの刺繍の上着の肩から、幅広の綬を懸けて、胸に大きな勳章をきらめかせ、片手に象牙細工の扇を持つてゐる。その扇の房も、絨毯も、夕焼けのやうな緋のいろである。

（『暁の寺』第一部十一）

【図1】の肖像画を参照すると、側机の上にはタイ国の伝統的な花瓶や水差し、酒瓶、杯など象徴的付属物が置かれ、花が活けられている。しかし「卓に片手をついた立像」であり、「桃色の刺繍の上着」「幅広の綬を懸け」「大きな勳章」「象牙細工の扇」などは描写の通りであるが、靴を

履いていて裸足ではないことがテキストの記述とは異なっている。画面の向かって右手には西洋風の椅子が配置される一方、左手には窓があり窓外には夕雲が流れオレンジが実り、全体に「夕焼けのやうな緋のいろ」のトーンである。服装は王族女性が着用する衣装であるが、パヌンとは異なり、近代以後に伝統衣装を改良して西洋風に仕立てた折衷スタイルである。さらに肖像画は次のように描かれている。

王家の人らしいやや沈鬱な気品が、浅黒い肌の沈鬱な肉感と相映じ、しかも衣装や背景の熱帯風な趣きが、これほど写実を装った画面に、おのづから幻想をにじませてゐた。

（『暁の寺』第一部十一）

肖像画において、妃は西洋人の風貌を持ちつつ、同時に服装や背景から民族性も表象し、いわば民族性と西洋とが融合したイメージが浮かび上がってくる。絵画の中でも肖像画は表象機能がより明確であり、望ましい像のイメージに適った修正や粉飾が施され、「肖像は、他面、<sup>リアリズム</sup>『写実』と<sup>アイデアルイゼーション</sup>『理想化』という二つの契機<sup>（図）</sup>の関数」を持ち肖像性と理想化を志向している。妃の絵姿も「写実」と「理想化」が限りなく接近した結果、先に述べたような「写実を装った画面に、おのづから幻想をにじませ」る画の様子が描かれている。この肖像画の制作年や成立の背景、作者の氏名は確定できないが、画家は「フェレンツェのイタリア人」として伝えられ、また Neungreudee Lohapon の *The Journey of*



King Chulalongkorn to Italy: a Dialogue on Art によれば、

Edoardo Gelli や Michele Goraigiani などの有名な肖像画家たちの絵がシャム王室の美術コレクションとして残されているため、これらの作家が、あるいは実際にタイ国に滞在したことのある他のイタリア人画家が描いた一枚という可能性がある。

スナンター妃の顔立ちは現存する写真【図2】と比較すると体格は大柄な印象で、眉毛もはっきり描かれ、目も大きく彫りも深い立体的な顔で、西洋人に近い印象がある。画の素材が西欧・タイ国のイメージの融合を示唆するだけではなく、油彩画のタッチも「ヴィクトリア朝の描法で、外人画家の丹念な奉仕のあと」(『暁の寺』第一部十一)が刻印された、いわば西欧の目を通して変換されたアジアと



【図2】スナンター妃 (写真)

いう印象を受ける。肖像画はテキストの描写との類似性を示していて、完全な想像によって三島が作り上げたとは考えにくい。スナンター妃の肖像画は他にもいくつか確認したが、その中ではテキストの描写に合致する構図は最も【図1】に近い。しかしタイ王族の肖像画・肖像写真は数多く存在するため、三島が他の画からイメージを借用・引用し、あるいは複数の肖像画を融合させてイメージを膨らませた可能性も否定できない。

妃の肖像画は、個人としての事実の記述ではなく、彼らが社会の中で果たしていた役割や要求に応じて創造され、むしろいかなる人物として表現されることが要請され、期待されていたかを示唆している。ルイ・マランは『王の肖像 権力と表象の歴史的哲学的考察』において、王の表象における権力と表象の相互関係について、「権力機構は表象を専有し、言語とイメージによる自らの表象を生み出す」と指摘している。マランが述べるように、「シミュラクル(幻像)、それが《表象する》という働き」ということは、スナンター妃の肖像画に即して言えば、妃自身が実際にはどのような人物であったかには関わりなく、観念的に産出され中心化され、表象機能を通して実体化された幻想であったことと対応している。それは妃の「瓜二つ」な相似形としてのジャントラパー姫もまた、テキストの中では「幻想」として形作られていることを示唆しているのでは

ないか。

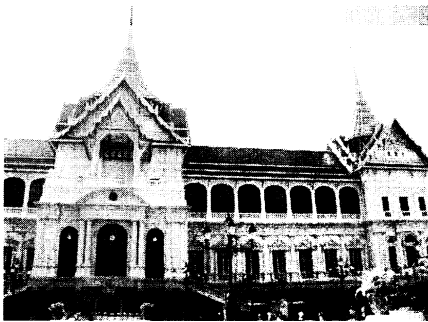
肖像画は国家的アイコンであるモデルが表象Ⅱ代行する国家、階級、文化の所有物に取り囲まれている。スナンター妃の肖像画は、民族性の強い器や衣装と、西洋風の家具や柱といった象徴的付属物に囲まれた全体像から、西欧と民族文化が融合・混淆したイメージを伝えている。民族的アイデンティティの確立と西洋化への傾斜という相反する意図に引き裂かれた表象形態を内包していて、三島の描写はそのような画の印象を忠実に伝えていると言える。さらに三島の表象Ⅱ代行の作業は、肖像画が配置されたチャクリ宮殿にも及んでいる。近代タイ国の西欧化とナシヨナリズムの発揚という矛盾する折衷的な姿を象徴するチャクリ宮殿は、【図3】に見られる通り、「一八八二年にチュラロンコン大帝が建てたこの宮殿は、イタリー人の建築技師によるネオ・バロック様式とシヤム様式との、壮麗きはまるみごとな混淆」（『暁の寺』第一部十一）として描かれている。<sup>(23)</sup>

伝統的建築と西洋様式が接合されている折衷的な建築様式は一九三〇年代の帝冠様式の日本建築にも見られるが、歴史的経緯は異なっている。<sup>(24)</sup>「チャクリ宮全体の結構が、堅固で理性的なヨーロッパ風の冷たい基階を、いたづらに複雑、いたづらに色彩の鮮やかな、狂ほしい高貴な王族の熱帯風の夢想で押しつぶし領略することにあつたのではな

いかと、想はせるに十分」（『暁の寺』第一部十一）な姿を露呈させ、建築物の描写が、作品の主題論的な展開と呼応している。「文字でスケッチ」するという言葉の通り、視覚情報を言語に再変換し、そこから一定のディスクリールを再構築するという方法論として言語的に遂行されている。

しかし「ヨーロッパ」と「熱帯」という二項対立的な図式そのものが、キャロル・グラックが述べたような「比較のフレーム（comparative frame）」として見た場合、西欧中心主義的な枠組と言わざるを得ない。西欧的な構築物が、一種の異物としてのアジアによって浸潤されるという図式にしても、西欧の側

の畏怖と魅惑を伝える点で、オリエンタリズムの構図に回収されてしまう。しかし問題は、西欧とアジアという二つの世界の拮抗の上に、日本というイメージの立ち上げが行われた点にある。本多は飯沼勲の死を通して、「純粋な日本とは何



【図3】チャクリ宮殿

だらうといふ省察」を強いられることになった。それを契機として「タイのやうな国へ来てみると、祖国の文物の清らかさ、簡素、単純、川底の小石さへ数まへられる川水の澄みやかさ、神道の儀式の清明などは、いよいよ本多の目に明らかになつた」(『暁の寺』第一部二)という思いに至る。「いはばメナムの濁水を、白絹の漉袋で漉した」ように、一度タイ国というフィルターを通して、本多の内奥で日本のイメージが浮かび上がってきたことがわかる。そして日本——タイ国という関係性だけではなく、タイ国を通して西欧を遠望する構造が形作られた。日本——欧米という単線的な構図の中で描かれてきた三島のテキストの中で、アジアというもう一つの要素を取り入れることで、相互を照らし合う鏡のような関係が構築された。このように一方にアジアの他の国々を置きながら、日本と欧米との関係を見据えるまなざしは第二部において展開していく。そして日本——アメリカ——アジアをめぐる関係性を描くことは、少なくとも三島のテキストにおいては新たな試みであったと言える。

## 五 昭憲皇后とサオワパー皇后の肖像

いずれにしても『豊饒の海』の第一作『春の雪』(「新潮」一九六五・九〇六七・一)において、松枝清顕がお据持の

行事で春日宮妃に「女人の美の目のくらむやうな優雅の核心を発見」(『春の雪』一)したように、妃のイメージは『春の雪』においても中心化され、それは綾倉聡子の横顔を見て「春日宮妃のおん横顔が、心ゆくまでうしろを振向かれなかつたときの心残り」(『春の雪』十七)が癒される瞬間へと繋がっている。テキスト内で「お上」の具体的イメージは希薄で具体的な像を結ぶことはなく、至高の禁忌はむしろ妃の身体を通して描かれている。

これまで述べてきたようなスナンター妃の肖像画の特徴は、明治二二年六月十四日に鈴木真一、翌日に丸木利陽が撮影した昭憲皇后の写真【図4】と比較してみると、その特徴が際立ってくる。『暁の寺』の深層にある妃のイメージ構築と歴史的文脈を接合して考察するために、ここで両者を比較してみたい。

【図1】と【図4】は、画面の向かつて左手に側机が置かれ、右側には椅子が配置され、立像である点など構図は似通っている。しかし昭憲皇太后の肖像画は左手には窓の代わりに閉じた扉があり、宝冠を被って大礼服を着用している。スナンター妃の肖像画では、側卓の上のテーブル懸けはめくり上げられて脚が見えているが、昭憲皇后の画は脚まで覆われている。側卓の上の花瓶には薔薇の花が活けてある。また皇后の服装は繊細な刺繍で飾られた上着、量感のあるスカートで頭には宝冠を戴き、肘までの手袋と真



【図4】昭憲皇后（明治神宮）

珠のブレスレットをつけた両手を交差させ、右手に扇を持っている。ネックレスと星形ブローチなど豪華な宝飾品を身につけた高貴で豪華な衣装であり、完全に西欧的に象徴された理想的肖像として描かれている。写真では色調はわからないが、エドアルド・キヨッソーネが制作した昭憲皇太后の四分の三身像のコンテ画を参照すると、さらにその違いが明らかになる。スナンター妃の画において西欧と民族性が混濁し、色調も赤や金が多様されて動的な印象があるのに対し、後者は西欧化の意図が明確でかつ徹底されており、ポーズも様式化された静的な印象である。日本・タイ国とも、天皇や王、皇后や王妃たちの肖像画・肖像写真は非常に多いため判断は難しいが、少なくともこれらの肖像

画を例に比較してみると、差異をはらみつつも両者とも西欧の王室肖像画のパターンを踏襲した形跡が見られる。しかしスナンター妃は西欧と伝統の融合的表象が見られ、例えば上半身が洋風であつても下半身のスカートが伝統衣装の形態を残しているのに対し、日本の側は完全に西欧的な肖像へと一気に、そして徹底的な転換が図られたと考えられる。ここに原武史が述べたような、個別の天皇の身体を媒介とする、視覚的で具体的な近代天皇制における「視覚的支配」のひとつの表れを見ることも可能であろう。

若桑みどりは『皇后の肖像——昭憲皇太后の表象と女性の国民化』（筑摩書房、二〇〇一・一二）において、キヨッソーネの画に描かれた日本に自生しない西洋の花である薔薇の表象について言及し、「皇后の肖像には、洋装というかたちをとった近代化・薔薇というかたちをとった女性性が、あくまでも西欧絵画と共通する画像形式によって描き出された」と指摘している。昭憲皇后の御真影には複数のバージヨンがあり、側卓の上の付属物は違っているが、欧化された画像としての「皇后御真影」と比較したとき、日本の伝統的な衣装から西欧的な皇后表象へと一気に移行を完了した昭憲皇后に比べ、スナンター妃が伝統的表象を表象Ⅱ代行し、むしろ西欧化を被りつつも伝統を保持した姿として描かれていたことがわかる。

さらに若桑は、伝統的衣装は国家や民族の伝統を表象し

ため、「国際的に見ても、アジア・アフリカ諸国の近代化の過程では、男性が西欧先進諸国の男性と同じ洋装を着用し、女性が民族衣装を着用する例が多い」（『皇后の肖像』）と指摘しているが、スナンター妃の肖像画もその一例であろう。Chamvit Kasetsin の *King Chulalongkorn's Grand Europe Tours With Special Reference to Germany* に *by 著* The photographs of the King of Siam dressed as a perfect Western Gentleman are displayed in houses, shops, and offices all over Bangkok. とあり、少なくとも西欧風の君主というイメージが国民に向けて流布されていたことをうかがわせる。軍服姿のラーマ五世が西欧的衣装を身につけた西欧化された身体で西欧的近代国家を象徴するのに対し、スナンター妃の肖像画は、民族的衣装を身につけていて、欧風は男性、民族風な表象は女性というジェンダー規制を反映した存在と考えられる。西洋文化と国家・民族表象を融合させた両義性をはらんだ王妃の肖像画は、妃という女性表象を通して国民性を称揚するという王権を補完する機能を持っていたのではないか。

## 六 もうひとりの王妃

近年昭憲皇太后など皇后に関する歴史的研究や肖像画を含めた表象分析が行われているが、明治天皇の政治的役割

を補完する機能を果たした昭憲皇太后と対峙すると考えられるのは、ラーマ五世の妃の中では早世したスナンター妃ではなく、皇后となりラーマ六世・七世の国母となったサオワバーであろう。サオワバー皇后は、ラーマ五世と共にタイ国の近代化のための制度の確立を目指し、西欧諸国への視察旅行が多かったラーマ五世に代わり、国内をよく統制し、国家的基盤の盤石ではなかった国政を補弼するなど、積極的な功績を残したことで知られている。

一方昭憲皇太后は近代天皇制に基づく国家建設の中で、「国民の心根を天皇制に吸収する強力な存在としての皇后」という機能を果たし、「近代皇后の宮中への養育の導入、洋装化の推進、学校・病院・日赤總會などへの行啓・謁見の定式化は、みな昭憲皇太后に始まる」という皇后の制度的機能の原型を作り、女性の国民化への道筋を示した人物であった。例えばオリヴ・チェックランドの『天皇と赤十字——日本の人道主義一〇〇年』によれば、「日本赤十字社は、草創期から皇室と関係があり、その援助を受けて来た」歴史的経緯を経ている。さらにチェックランドは「日本の赤十字運動への参画が、国家としての正当性を認めさせる一つの方策であったことは疑いがない」と指摘し、赤十字運動が国際的評価と繋がったことを強調している。

一八八六年に日本が正式会員として認知され、他のアジアの国々では続いてシヤムが一八九六年に加入を認められて

いる。<sup>(32)</sup>このようにサオワパー皇后は国際赤十字運動などの社会福祉事業の保護育成につとめ、赤十字の総裁となり、女子教育の振興のために皇后女学校を開設し、東京女子師範学校教授であった安井哲を招聘し、日本へ女子留学生を派遣するなど近代国家としての女性の国民化を体現した存在であり、その点で昭憲皇太后と共通性を持った人物と言える。

昭憲皇太后について片野真佐子は、「強烈な政治的個性を発揮した女性」<sup>(33)</sup>と評価している。一方、若桑みどりとは軍事・政治・産業という「男性的」領域における国家指導者という役割を帯びていた天皇に対し、「女性の統御と支配」を果たした皇后の役割について、「皇后は近代国家のなかであらたに女性の領域であることが先進国によって示された領域、すなわち、看護、繊維産業、福祉事業、女子教育の四部門の指導者としての役割」<sup>(34)</sup>があつたと述べている。近代国家の指導者としての天皇・皇后のジェンダー役割が明確化・分離化された。昭憲皇太后は日清・日露戦争時の行啓といった「報国恤兵、博愛慈善」に基づく傷病兵の看護等に際しても、その「御仁慈」はジェンダー役割分担の明確化と共に天皇の機能を補完するという公的領域における役割が強調されている。

このような近代国家における皇后の担った職務・役割の原型がどこに起源を持つかについて、プロイセンで侍従を

務めた経験を持ち、外務省の顧問として昭憲皇后の相談役であつたオットマール・フォン・モールは、次のように証言している。

明治維新以来、王妃たちも洋風に交際をする義務を負うようになった。したがって、洋風に王侯の職務を果たすことを感受性の強い今の皇后は強く望まれた。ドイツ皇帝皇后兼プロイセン王国王妃のアウグスタの実例が、日本の皇后にとって模範となつた。<sup>(35)</sup>

このように比較を試みてみると、タイ国において昭憲皇后の業績と対比できる存在は、サオワパー皇后と考えられる。皇后役割の策定と実施について、日本とタイ国が何らかの影響関係にあつたかどうかについての検証は、筆者の力の及ぶところではないが、少なくともアジアの後発近代国家であつた両国において、ヨーロッパを模倣した皇后役割が機能し、なおかつ皇后がそのようなイメージのもとに表象され、顕彰されたという共通点が見られたと言つてよいのではないか。ただし最近、スナンター妃についても、一八七九年四月にアメリカ前大統領グラントが世界旅行の途上でシヤムを訪れた際に、英語のできるスナンター妃に面会するなど、その外交的手腕を指摘する見解もある。<sup>(36)</sup>少なくとも現実の妃は、三島が描いたような「幻想」の彼方に揺曳し、「肉体」のみの存在として描かれたジャントラパー姫につながるような女性ではなかつた可能性がある。

王妃は国王の体現する国家権力を補完する存在として、肖像画に象徴的に描かれ、その理想的イメージが流布された。王権が現実社会の政治として機能するとき、昭憲皇后やサオワパー皇后が果たした女性ジェンダーの国民化の軌跡は、明治天皇やラーマ五世の表層の権力構造を補完するものであったと言える。一方、スナントー妃は、『豊饒の海』に展開する天折、禁忌の身体、恋愛といったコードを通して三島によって主題論的に変換され、ジャントラパー姫の起源となる『暁の寺』の深層を支える人物として物語の中に埋め込まれたと考えられる。「優雅といふものは禁を犯すものだ、それ至高の禁を」（『春の雪』二十五）と清頭が考えるとき、禁忌は聡子の身体という場において顕現していた。禁忌の身体を抱えた聡子は「生れついでのお姫様」（『春の雪』三十七）として、春日宮妃の優雅の記憶に繋がり、王権の禁忌が身体という局面において表出された象徴として描出されている。もうひとりの妃であるスナントー妃も、三島によってジャントラパー姫に連なる人物として設定され、禁忌の身体と天折という物語に組み込まれたと考えられる。彼女たちは正統な歴史の表舞台に立つ政治的存在としての皇后になることはなかったが、王権を裏面から支えている。ここには「文化防衛論」（『中央公論』一九六八・七）で展開された、「政治概念としての天皇は、より自由でより包括的な文化概念としての天皇を、多分に

犠牲に供せざるをえなかった」という記述が小説テキストの上で具体的な形を与えられた例を見ることができる。特に『春の雪』『暁の寺』において、現実政治の上では存在しない「文化概念としての天皇」の影は、「概念」を補完する妃の身体を通して形象化されている。そしてスナントー妃の系譜に連なるジャントラパー姫は、飯沼勲の生まれ変わりというだけではなく、もうひとりの妃である聡子と深層において繋がることで、『豊饒の海』を深層で繋ぐ新たな物語が浮上してくる。禁忌という抽象的観念は、『豊饒の海』において身体という（見られる）局面において展開している。『暁の寺』は、二つの王権をめぐる物語が、テキストにおける虚構と史実の中の言説と交錯し合いながら成立した。

三島由紀夫のテキストの引用は、『決定版三島由紀夫全集』（新潮社、二〇〇〇～二〇〇五）に拠った。また「凶版」はそれぞれ以下から転載した。

【図1】 *Bang Pu-In Palace*, Keokhwan Vajiradaya, The Bureau of the Royal Household, Bangkok: Thai Watana Panich Press Co., Ltd, 2003

【図2】 *A Royal Album, The Children and Grandchildren of King Mongkut (Rama IV) of Siam*, Jeffrey Finestone, Loma Holding Co., Ltd, 2000

【図3】 チャクリ宮殿

【図4】昭憲皇太后九十年祭記念展「昭憲皇太后——美しき明治の皇后——」（明治神宮、二〇〇四・四）

本論は平成二年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「日本文学に描かれたタイ国文化表象の分析研究」（課題番号：22520184、研究代表者：久保田裕子）に基づく研究成果である。

## 注

- (1) 三島由紀夫「豊饒の海」について」〔毎日新聞夕刊〕一九六九・二・二六
- (2) 柴田勝二「『暁の寺』と唯識論——『豊饒の海』への視角」〔日本文学』第六〇集、一九九・五、改題して「途絶する『流れ』——『暁の寺』と唯識論」〔三島由紀夫 魅せられる精神』所収、おうふう、二〇〇一・十一）
- (3) 井上隆史「『豊饒の海』における輪廻説と唯識説の問題」〔国語と国文学』第七〇巻六号、一九九三・六、『三島由紀夫 虚無の光と闇』所収、試論社、二〇〇六・十一）
- (4) (2) に同じ
- (5) 田中美代子「覗く者と覗かれる者の密通劇——『暁の寺』——」〔波〕一九七〇・七・八「ロマン主義者は悪党か」所収、新潮社、一九七・四）
- (6) 柳瀬善治「『暁の寺』論——芸術と救済の否定——」〔三重大学日本語学文学』一〇号、一九九九・六、『三島由紀夫研究——知的概観的な時代』のザインとゾルレン』所収、創言社、二〇一〇・九）
- (7) 『観光のまなざし 現代社会におけるレジャーと旅行』（ジョン・

アーリ、加太宏邦訳、法政大学出版局、1995・2、John Urry, THE TOURIST GAZE, Leisure and Travel in Contemporary Societies, Sage Publications, 1990）

- (8) 昭和一〇年代の日タイ関係については、拙稿「『暁の寺』の二つの時代——三島由紀夫のタイ国取材の足跡から——」（松本常彦・大島明秀編『九州という思想』所収、九州大学大学院比較社会文化研究院・花書院発行、二〇〇七・五）において論じた。本論はその後の調査によって明らかになった内容を付け加えている。
- (9) 石井米雄「タイ国王をめぐる言説」（網野善彦他編『岩波講座 天皇と王権を考える 第五巻 王権と儀礼』所収、岩波書店、二〇〇二・七）
- (10) 吉川利治「序章 1 近現代史のなかの東南アジア」（吉川利治編『近現代史のなかの「日本と東南アジア」』所収、東京書籍、一九九二・一〇）
- (11) 『定本三島由紀夫書誌』（島崎博・三島瑠子編、薔薇十字社、一九七二・一）
- (12) 富沢寿男「2章 王権観念の原理と諸相」（土屋健治編『講座 東南アジア学 第六巻 東南アジアの思想』所収、弘文堂、一九九〇・一一）
- (13) 拙稿「近代日本における〈タイ〉イメージ表象の系譜——昭和10年代の〈南洋〉へのまなざし——」（『立命館言語文化研究』第二・巻三号、二〇一〇・一）において言及している。
- (14) (8) に同じ
- (15) 『決定版三島由紀夫全集』第十四巻（新潮社、二〇〇二・一）に収録された「解題三」（田中美代子）「『暁の寺』取材ノート（3冊目より）」には、〈(3・10・67) バンコック、タイ王宮、住居、園絵、タイの建造物、チャクリ大王宮、外観、内部、寄付きの間、



歴代王妃の肖像画」という記述に関する指摘があった

- (16) *Bang-Pai Palace* (Keokwan Vajrodaya, 'The Bureau of the Royal Household, Bangkok: Thai Watana Panich Press Co., Ltd, 2003)
- (17) (9) に同じ
- (18) 森田義之「ヨーロッパにおける『王』の肖像——イコノグラフィと機能」(『日本の美術 天皇と公家の肖像』第三八七号、一九九八・八)
- (19) (『タイ文化の魅力 歴史・美術・建築・他 観光ガイドの手引き』(チュラーロンコーン大学成人教育センター編・刊行、一九八八)。またラーマ五世が一九七七年のヨーロッパ訪問の際にフェレンツェを訪問して王家の肖像画・彫像を直接注文した経緯については、N. LOHAPON, *King Chulalongkorn and Florentine Artists*, in *Journal of the Faculty of Arts*, Vol.28 No.1, January-June 1999, Bangkok を参照した。
- (20) The Visit of King Chulalongkorn to Europe in 1907: Reflecting on Siamese History, The Centre for "European Studies at Chulalongkorn University, 2007
- (21) ルイ・マラン「序 三つの定式」(『王の肖像 権力と表象の歴史の哲学的考察』所収、渡辺香根夫訳、法政大学出版局、二〇〇二・一〇)
- (22) (21) に同じ
- (23) 『王宮 エメラルド仏寺院』(ネンノイー・サククスイー著、マイケル・フリーマン撮影、ブレイ文子訳 Bangkok: River Books, 1999) は、チャクリ宮殿(プラティナーン・チャックリー・マハー・ブラーサート宮殿)について、「新ルネッサンス様式の建築」とあり、三島の述べた「ネオ・バロック様式」は勘違いであろう。タイ伝統様式の屋根の上に幾層にも重なった尖塔を載せている形態について、「本来、ドーム型の屋根に設計されていたが、元摂政の保守派の官僚たちは、同じ基軸線上に並ぶ両脇のタイ様式の屋根と調和させるため、アユタヤの宮殿のようにタイ様式の屋根にするよう、要求した」と建築の経緯について述べている。また *Grand Palace*, Bangkok: The Bureau of the Royal Household, 2005 によれば「チャクリ宮殿は外国からの客をもてなすために建設された。"the policy that corresponds with the popular custom of the civilized world" という目的を持った場所にスナタナーの肖像画が飾られていたことになる。
- (24) 磯崎 新『建築における日本的なもの』(新潮社、二〇〇三・四)によれば、帝冠様式は、一九三〇年頃に、「保守的基盤を背景とした日本の様式的折衷主義」であり、瓦屋根を載せ、様式的な装飾を附加した建築物である。
- (25) キャロル・クラック「序」(『歴史で考える』梅崎透訳、岩波書店、二〇〇七・三)
- (26) 昭憲皇太后九十年祭記念展『昭憲皇太后——美しき明治の皇后——』(明治神宮、二〇〇四・四)
- (27) 「エドアルド・キヨッソーネ伝」(沢護「三彩」no.350、一九七六・一〇)によれば、Edoardo Chiossone は一八三二年一月二二日、イタリアのジェノバ湾に面したアレンツァノ生まれで、明治二年一月、明治天皇の正装並び軍服姿の制作を宮内省より受けた。同月一四日に芝弥生神社に行幸したときに陰から写し取り、軍服姿の銅版印刷は明治二六年一月二二日に完成した。また隈本謙次郎「エドアルド・キヨッソーネ」(「お雇い外国人エドアルド・キヨッソーネとその時代展——キヨッソーネ来日100年を記念して」イタリア文化会館、一九七六・一〇)によれば、薩摩藩士であつ

た西郷隆盛、大山巖、西郷従道などの肖像画を描いている。

- (28) 原 武史『可視化された帝国 近代日本の行幸啓』（みすず書房、二〇〇一・七）

- (29) The Visit of King Chulalongkorn to Europe in 1907: Reflecting on Siamese History, The Centre for European Studies at Chulalongkorn University, 2007

- (30) 片野真佐子『近代日本における皇后の政治的機能——護憲論の

- 一つの陥穽——』（大阪商業大学論集）第一三九号、二〇〇六・一）

- (31) オリウ・チェックランド『天皇と赤十字——日本の人道主義 1000年』（工藤教和訳、法政大学出版局、二〇〇二・一〇）

- (32) (31) によれば、「一八八六年六月六日、日本は赤十字運動の正式会員として認知された。わずか三〇年前まで外の世界に対して事実上門戸を閉ざしていた国にとっては驚くほど早い承認であった。アジアの他の国々では、日本を除いて唯一の独立国であったシヤムが一八九六年六月二九日に、日本が事実上の植民地化を進めていた朝鮮が一九〇三年一月八日に、そして中国が一九〇四年六月二九日にそれぞれ加入を認められた。」国際社会に認定されるための両国の方針の共通性を示唆する例であると考えられる。

- (33) 片野真佐子『近代皇后論』（網野善彦他編『岩波講座天皇と王権を考える 第七巻 ジェンダーと差別』所収、二〇〇二・九）

- (34) 『皇后の肖像——昭憲皇太后の表象と女性の国民化』（筑摩書房、二〇〇一・一一）

- (35) 神田豊穂『昭憲皇太后』（『皇室皇族聖鑑明治篇』福岡毎朝新聞社、一九三五）

- (36) オットマール・フォン・モール『ドイツ貴族の明治宮廷記』（金森誠也訳、新人物往来社、一九八八・四、Am japanischen Hofe BERLIN 1904）

- (37) 『ラタナコーシン探検——私たちが知っていることが全てではない』（ガイルーク・ナーナー、マティション出版社、二〇一〇・四）には、一八七九年にシヤムを訪れたグラント前アメリカ大統領夫妻をもてなし外交的手腕を発揮するスナンター妃についての記述がある。またグラントはその後日本を訪れて明治天皇とも面会している。本書のタイ語の翻訳は九州大学大学院のトリケツサクルチャイ・タナボーン氏に依頼した。またフランスの新聞 LE MONDE ILLUSTRÉ (1883.3.25) では肖像写真のイラストとスナンターの転覆事件を報じ、アメリカの雑誌 COSMOPOLITAN (1890.4) では、THE QUEEN OF SIAM としスナンターの肖像写真が掲載されている。

（くぼた ゆうこ・本学教授）